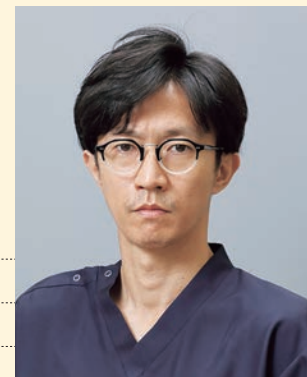




早期変形性膝関節症に対する 膝周囲骨切り術

整形外科 羽土 優



変形性膝関節症は痛みにより日常生活動作を障害し、生活の質を低下させて廃用症候群に陥るリスクを高めます。そのために早期に診断し、治療介入することが大切です。

変形性膝関節症の手術治療法として膝周囲骨切り術 (around knee osteotomy:AKO) が近年盛んに行われるようになりました。この手術は人工膝関節置換術と違い自分の膝関節を温存できることが最大の特徴です。

関節を温存する手術のため登山やジョギング、その他スポーツ、仕事内容など日常生活の制限を基本的には必要としません。

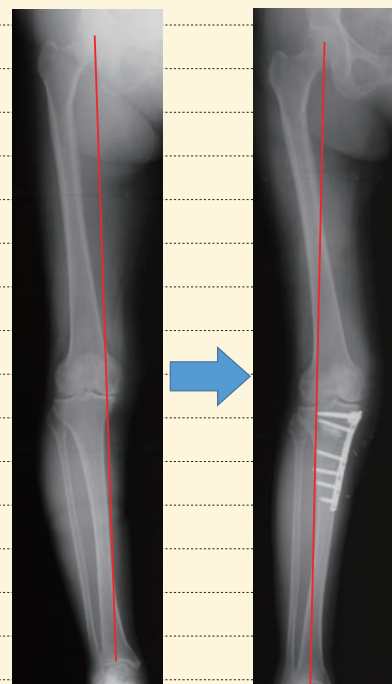
膝周囲の大腿骨または下腿骨を切り下肢のアライメントを変えることで傷んだ部分への負荷を軽減し除痛します。

特に日本人ではO脚の人が多く体重が膝の内側コンパートメントにかかるため内側の変性が進みやすい傾向があります。そのため体重が外側にかかるように大腿骨や脛骨を切りO脚の矯正を行います。

手術の適応は比較的若年で変形が内側に限局し外側の軟骨が正常な早期変形性膝関節症の方となります。ざっくり言うとレントゲンでは大した変形ではないけど、関節内注射や鎮痛剤では効果が乏しいなあというような方がよい適応と考えられます。

早期変形性膝関節症はレントゲンだけでは診断が難しいケースも多いため、当院ではMRIなども併用して診断し手術を行っております。

当院では一人ひとりの患者さんの変形の進行度、年齢、活動レベルなどに応じて、膝周囲骨切り術や人工膝関節置換術の最適な術式を提案しています。



手術前；膝内側に負荷がかかっている

手術後；アライメントが矯正され膝内側の負荷が軽減されている

患者経験価値調査 (PXS) および職員満足度調査の結果について

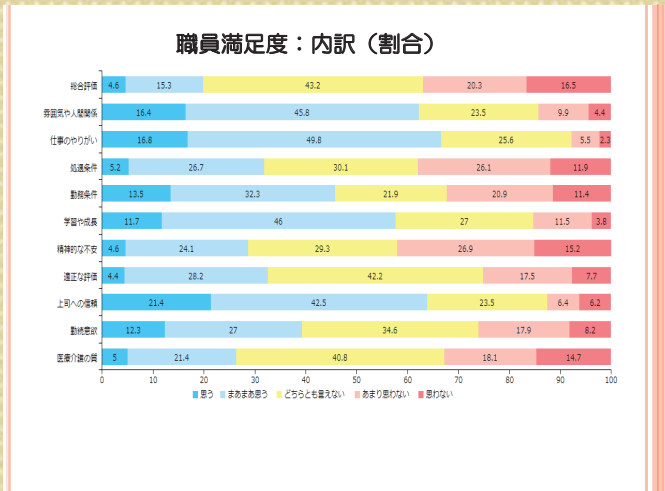
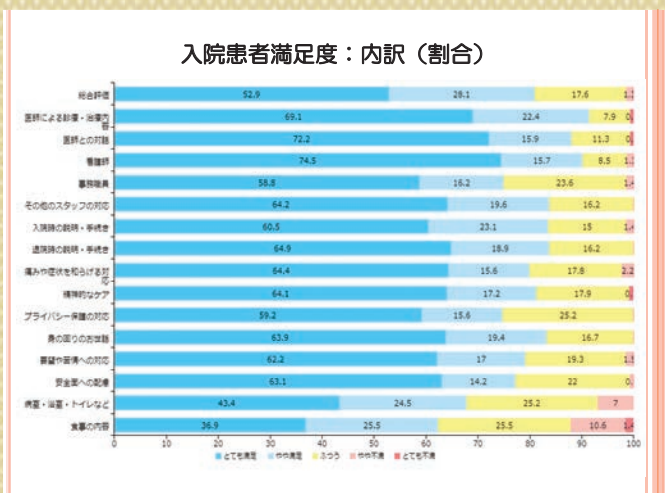
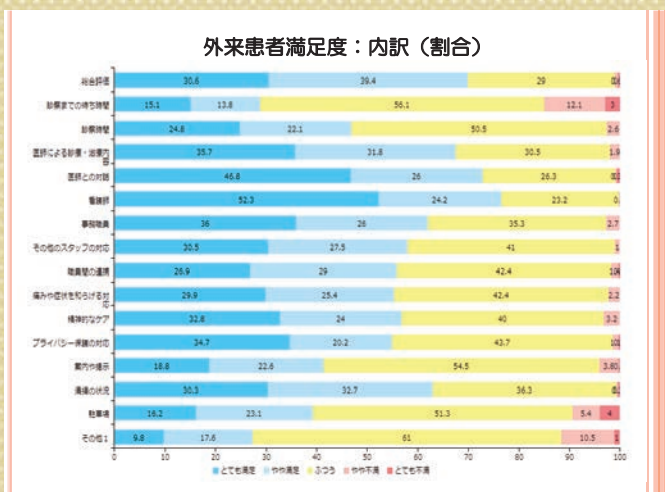
接遇向上委員会委員長 土岐善紀

当院では毎年11月に患者ならびに職員に対してアンケート形式による満足度調査を施行しています。その結果は日本ホスピタルアライアンス委員会の分析調査に登録され、現状や今後の課題に活かしています。本稿ではその内容について紹介し接遇委員会としての見解や活動を紹介します。

まず、PXSとはPatient (患者) eXperience (経験) Survey (調査) の略で、「当院を受診した患者の経験を価値化する」ことで見える化を図ろうとすることと考えてください。従来の患者満足度調査が主観的な評価であったのに対して、PXSは患者の診療フローの各プロセス(待ち時間、移動、診察、食事、対話、睡眠・など)を経験価値として数値化することを目的としています。

では、当院の数値はどうだったのでしょうか。2022年度の調査結果では、医師の病状説明や看護師の対応、患者の保護は高評価であった一方、スタッフ間の情報連携、駐車場や院内の環境、案内のわかり易さや待ち時間の長さが不快な経験となっていました。これらの内容を1)ハード部門(病院の施設や環境など動かさないもの)、2)ソフト部門(スタッフの行動規律・マナー、食事、組織文化など)、3)システム部門(院内の取り決め、案内掲示、会計やデバイスなど)のどれに起因するかについて分析することで私たちが取り組む課題や優先順位が見えてきます。接遇委員会として関わる領域では、例えば職種を越えたチームとしての情報共有や患者への案内(わかり易さ)に改善の余地がありました。コロナ禍を経験し、多職種での患者回診や密な接触を避ける傾向が続いていますが、だからといって患者の心理的安全性を失ってはけません。年度比較データでは、コロナ禍前(2019年度)、コロナ禍中(2020年度)と2022年度を比較すると(数字は同順)、外来部門の総合満足度で「とても満足」または「やや満足」とした患者比率は、それぞれ71.4%、67.0%、70.0%でした。入院部門の総合満足度は、それぞれ89.2%、75.0%、81.0%でした。コロナ禍で落としたものを我々はまだ完全には取り戻せていません。一方、PXSの目的である患者の経験価値を高めてもらうには、我々もまた多くの経験的価値を持っている(知っている)必要があり、そこに接遇が入る余地があります。また、総合病院に普遍的な「待ち時間の長さ」については、待ち時間を短縮するという従来の考え方から、待ち時間を快適なものにする、という考え方へのマインドチェンジも必要と捉えています。まちなかやカフェなど私たちが快適と感じる空間にそのヒントがあるかもしれません。

さて、接遇委員会の活動としては、これまでの「習う接遇」から「実行する接遇」に切り替えてきました。さらに今後は「考える接遇」つまり自分の長所を活かした“自分の接遇”に高めることで自他を幸せにし、患者からは「市民病院は一味違う」と言ってもらえる組織文化を創



生することが目標です。その一歩として接遇教本「マナーのいずみ」を根本からリニューアルし「遊びと余裕」をテーマに4本の動画を作成し、困ったときのQ and Aなど“経験的価値”を高める内容を盛り込んだガイドブック「My Hospitality」を作成しました。「どの病院でも行っている普通感漂う接遇」が今後、どう変化していくのが楽しみです。退院した患者が紹介元の先生がたのところに戻られた際、当院での治療経験をお話する機会がありましたら（良いことも悪いことも）、是非それを私どもにお聞かせください。
最後になりましたが職員満足度にも触れておきた

と思います。患者からは良い評価を得ているにもかかわらず、職員満足度はかなり低い状態にあります。全国的にも医療職は「苦勞の割に報われない感」を感じていることをデータは示しました。では、我々はどこへ向かえばいいのでしょうか？仕事を通じて培った接遇の経験的価値を患者満足にのみ活かすのはもったいない。職場の同僚に、友人に、家族に対しても同じように活かすことで自分自身の心理的安全性を確保できる環境を作っていき、「自分が幸せになる」ことがPXSを通じて得た接遇委員会の目指すところなのです。

研修・講演・学習会のご案内

1. 地域連携症例検討会（ハイブリッド開催）

日時：10月10日（火） 19：00～20：00

場所：当院3階 講堂

1) 症例検討

『皮膚細菌感染症と鑑別を要した壊疽性膿皮症の1例』

小児科 中里 圭貴

2) ミニレクチャー

『顔面けいれん・三叉神経痛に対する自己フィブリン糊を活用した微小血管減圧術』

脳神経外科 毛利 正直

機能的脳神経外科とは、直接生命を脅かすものではないが日常生活に支障をきたす各種の神経機能異常を外科的処置で治療する分野です。顔面けいれんは眼輪筋や口輪筋などの顔面筋が発作的、間欠的に反復して収縮するものであり顔面神経に頭蓋内血管が圧迫し発症します。三叉神経痛は一侧の顔面に発作的激痛を繰り返すものであり三叉神経に頭蓋内血管が圧迫されることにより発症します。いずれも機能的脳神経外科疾患ですが圧迫された脳神経に対して微小血管減圧術を施行する際に、当科では自己フィブリン糊を活用して手術を行なっています。自己フィブリン糊とは患者自身の血液から作成するもので、当院では2018年に北陸では初導入（全国で10施設目）されたクリオシールシステム活用しています。具体的には手術の1週間

前に患者自身が200mlの自己血採血を行い、手術までにクリオシールシステムを用いて自己フィブリン糊、自己MAP、自己FFPに精製しそれぞれ分離保管します。手術当日に外側後頭下開頭を行い、顕微鏡下に頭蓋内血管により圧迫された脳神経を剥離し減圧し頭蓋内血管を発症前の走行に戻します。次に頭蓋内血管が再び脳神経に圧迫しないようにフィブリン糊とテフロンフェルトを使用して固定します。従来の生物由来製剤であるフィブリン糊は供血者由来の製剤であり、感染や宿主反応、供血者の不足、高額、善意に依存するなどの問題があります。当院で活用している自己血フィブリン糊はそれらの問題点を克服する画期的な方法であり、当科での取り組みに関して解説します。

予告

日時：11月14日（火）

19：00～20：00（ハイブリッド開催）

場所：当院3階 講堂

内容：①症例検討 1例（担当）皮膚科

②ミニレクチャー 1題（担当）内分泌代謝内科



作：病院ボランティア 篠崎 佳子

どんな感じなの？ 骨密度測定検査

放射線技術科 石崎 健治



富山市民病院では骨粗しょう症の診断や骨折リスクの総合的評価、また治療効果の評価などをおこなうため、DXA法（デキサ法：二重エネルギーエックス線吸収

測定法）を用いた骨密度測定装置を使用しています。基本的には腰椎と大腿骨頸部の2部位での測定をおこないますが、測定部位に手術による金属などのインプラントがある場合は正しく測定できないため、その場合は前腕骨を組み合わせた2部位とし、正確な結果となるようにしています。X線を使用しているため放射線被ばくを心配

されるかもしれませんが、DXA法による被ばく線量は約0.075mSv（mSvは線量を示す放射線の単位）と極めて少なく、胸部X線検査の約0.06mSvとほぼ同等です。ちなみに私達が日常生活で受ける自然放射線による被ばく線量は1年間で約2.4mSvと言われており、骨密度測定における被ばくはほんのわずかといえます。検査はリラックスした仰向け姿勢で寝ていただき、測定部位に金属のファスナーやボタンが無ければ更衣の必要も無いため、早ければ5分程で終了します。

当院では今年度に骨密度測定装置を更新する予定となっており、新たな機能として海綿骨構造指標（TBS）が可能となります。もうすぐ新しい装置で、より高精度で低被ばくの骨密度測定検査を受けて頂けるようになります。ふれあい地域医療センターで検査のみのご予約もお取りしていますので、ぜひご紹介いただければ幸いです。

医師不在のお知らせ

※外来担当日の休診のみ掲載

10月

科名	医師名	不在日	科名	医師名	不在日
内科	石坂	6日	皮膚科	野村佳	20日
産婦人科	長谷川徹	12日、13日		大村	10日
麻酔科	津田	2日	脳神経外科	毛利	25日、26日、27日
	篠田	17日	呼吸器・血管外科	湖東	2日、10日、12日
	高木	3日	眼科	山田芳	6日
形成外科	宮下松	10日	歯科口腔外科	寺島	2日、30日、31日
			朽名	27日	

※その他、急に不在となることがありますので、ふれあい地域医療センターまでお問い合わせください。TEL 076-422-1112（代）内線2168

編集後記

厳しかった夏の暑さも少し和らぎ、紅葉が待ち遠しく思える頃になりました。夏の疲れが出やすくなっている今日この頃、体調を気にかけ過ぎていきたいものです。

今年度は6月に4年振りとなる地域連携の会を開催すべくスタッフと準備をすすめ地域医療連携機関の先生方に案内状をお送りしました。はたして地域の先生方は来てくださるだろうか、感染対策はこれでよいだろうかと心配していましたが、とても多くの先生方から出席のお返事やお電話をいただき本当に嬉しく思いました。

欠席のお返事の中にも温かいお言葉を添えていただき、開催できることへの喜びをかみしめた次第です。ふれあい地域医療センタースタッフ一同、講演会、懇親会がとても盛況であったと感じております。

「Face to Face, Heart to Heart」顔が見える連携を大切に、地域の先生方と連携していきたいと考えておりますので、今後とも富山市民病院をよろしくお願いいたします。

ふれあい地域医療センター 石崎 華代

「れんけいと支援」に関するお問い合わせは、ふれあい地域医療センターまでご連絡ください。送付を希望されない方はお申し出ください。

TEL 076 (422) 1112 (代) / FAX 076 (422) 1154
メールアドレス fureairenkei@tch.toyama.toyama.jp



ホームページ <http://www.tch.toyama.toyama.jp/> がん何でも相談室：メールアドレス shien@tch.toyama.toyama.jp